



町会長協議会会報の創刊にあたり

福生市長 野澤 久人

町会長協議会会報「ちいき（地域）」の発刊を、皆さんと共に、心から慶びたいと思います。

町会・自治会は、基本的に地域で自主的に参加し、お互いに助け合う（互助）組織ですが、時代時代でその活動は、様々でした。

しかし、今は最も本来の形に近い活動が行われ、近代化が進んでいる時代ではないでしょうか。

地方主権（自分達のまちは、自分達で創る）が進み、公助（行政が行う仕事）の範囲が財政負担に応じ限定されてくると共に、行政では出来ない仕事が増えつつあります。

その典型が、大地震や火災時の初動活動、防犯などでしょう。又、気持ちよく地域生活を送り、子どもを育てるには、隣近所で支え合うことが必要になります。

都市は、このような大きな地域生活の仕方（互助）が無くても生きられる場所であるといった考え方もあり、又、そのような生活の仕方を失わせてきましたが、今は、その重要性が再認識され、それが無いと生

活が出来ない時代になっています。

福生警察署の十六年対十七年の統計を比較してみると、十七年の犯罪総件数は約十五パーセント減少し、特に侵入盗犯では、四〇パーセントも減りました。町会などが、地域パトロールをしたり、防犯の話などによる意識の高揚、お互いに気を付けていくことを広めてくれたことなど多くのご協力に感謝すると共に、警察や役所他が協働して努力した結果でしょう。

福生に来ても皆の目が犯罪は犯せないまちであるというように成る為には、まだまだ全市民の協力が必要で、その中核をなす町会・自治会の活動は欠かせないものであります。

健康や環境や安心・安全、豊かな市民生活は誰かがやってくれるものではなく、自分達で創るものとして、自らが努力しないとどこかでそのお返しにくるということです。

会報が、そのことを理解する市民が一人でも多くなるのに、設立つことを願っています。

第一回目は、どんど焼きについて触れたいと思います。

福生市及び周辺地域では「セーノカミ」「サイノカミ」と呼んでいましたが、現在は「どんど焼き」の呼称が一般的となりました。

歳神（トシガミ）の帰るときに正月の飾り物を焼くことを一つの目的として火をたく、行事で、全国各地で見られる小正月（一月十五日）に行われる火祭り行事の一つです。

子供が中心となつて行われますが、しめ飾りや門松を積上げて焼いた煙に乗って歳神さまが帰る、とか、昔初めをこの火で焼やし、燃えさしが空高く上がると、平がある（習字が上手になる）、この火で団子（小正月の行事の一つのまゆ玉飾り、養蚕の豊作を祈る行事で作った団子）を焼いて食べると風邪をひかない、その燃え残りを持ち帰って除災招福（じよさいしようふく）のまじないとする、などの伝承が内容となっております。

ふっさ再発見 vol.1  
～どんど焼きの由来をご存知ですか～

市内では三十年ほどこの行事が中断していましたが、最近復活し、志茂第一町会では毎年、成人の日が多摩川中央公園付で行っています。その他、福生さんと焼きの会が毎年一月中旬の日曜日、かに坂公園で行っています。

館川地域で昭和三十年代まで伝えられていた様子をたどると、正月七日の早朝、小学生が各戸の飾り物を集めて半紙で巻（へい）を切って、長い棒の先に結わえ付け、逆筋へ建てます。そして十四日の早朝、田んぼの道（みちつじ）へ正月飾りやだるまを三メートルくらいに積み上げ、町内を「だんごやき」と呼んで歩き、人を集めて火をつける、という形式で行われていました。



かに坂公園でのどんど焼き